

2025.11.10

No.248

編集・発行人 樋口みな子

E-mail: minginga@agate.plala.or.jp

URL: <http://www.minaginga.sakura.ne.jp/index.html>

ゆうちょ銀行から

(記号) 19710 (番号) 02218911

他銀行から

(店番) 978 (口座番号) 0221891

ヒグチミナコ (郵送料年間 2,000 円)



## いのちといのちの出会いで、世界は変わる

### ケニアの「シロアムの園」の公文和子さんの講演を聞いて

10月18日「ケニアの障がいのある子どもたちが教えてくれる平和」という講演会が札幌の北光教会でありました。講師は小児科医の公文和子さん。ケニアで障がいのある子どもたちとその家族を支える施設「シロアムの園」を立ち上げられた方です。NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」やTBS「情熱大陸」でも取り上げられたので、ご存じの方も多いかもしれません。



公文和子さん

和歌山県生まれ、東京育ちの公文さんは、北海道大学で学び、2000年までの6年間は日本で医師として働かれました。その後、東チモール、シエラレオネ、カンボジアを経て、2002年末からケニアで活動を開始。最初の10年間はエイズや結核など感染症対策、保健事業などに従事しましたが、「これが本当に自分のすべき仕事なのか」と悶々とした日々を過ごしていたそうです。

転機となったのは、勤め始めた小さな小児科クリニックで、ある日、出会ったクライドくん。重い脳性まひで歩行が困難でしたが、お母さんに深く愛されて育ったことが伝わってくる素敵な笑顔の持ち主でした。その笑顔にひと目ぼれた公文さんは、「ひとりの人間として向き合おう」と決意し、子どもに恐怖感を与えまいと白衣を脱ぎ、2015年に「シロアムの園」を始められました。

講演では、症状や家庭の事情も異なるさまざまな子どもたちの様子が語られました。たとえばアグネスちゃんは14歳。脳性まひで下半身が麻痺しており歩けません、学ぶことが大好きで、学校に通いたいという願いを持っています。医療ケアの不足から通学は難しく、現在は週2回シロアムに通っています。車いすが使えるようになり、彼女の世界は大きく広がりました。「素晴らしい笑顔の裏には、た

くさんの痛みがあります」と公文さんは語ります。

子どもたちが表情を持つには表情を出せる環境が必要です。それは人との関わりの中で喜びを感じたり、好きなことに出会ったり、「本は苦手だよ」といった否定的な感情も含めて、さまざまな経験があるからこそ目や耳が発達し、表情が生まれるのです。

ランチタイムは、子どもたちの状態に合わせて、楽しく食事ができるよう工夫されています。障がいのある子どもたちとその家族は、さまざまな困難を抱えています。シロアムではその人を丸ごと受け入れ、包括的なケアを提供し、問題を共に考えることで、一人ひとりが輝いて生きていけるような関わりを目指しています。

子どもたちが平和を感じられる環境のために、みんなでのちを喜び合い、新しい体験を共にする。経済的安定も家族の幸せにつながります。地域の人々に、障がいのある子どもたちの存在を知ってもらうことも大切です。「平和な環境では、いのちは元気に育つ」と、公文さんは素敵な笑顔で語ってくださいました。

このところ気持ちが沈みがちだった私も、公文さんの笑顔に励まされました。

ぜひ、NPO法人「シロアムの友の会」に入会し、支援の輪を広げていただければと思います。

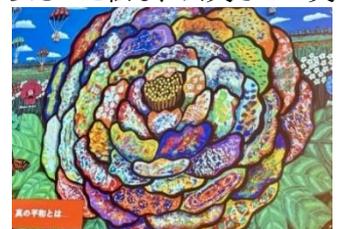
<https://friendsofsiloam.net/>

(文と写真 樋口みな子)

(写真は公文さんのスライドから)



子どもたちの笑顔



自分の好きな方法で花びらを描いた壁画



# 記録・記憶し、そして継承する旅 市民による民主化

## 運動の原点を訪ねる旅 in 韓国・光州 松浦 幸子



### ハン・ガンの小説『少年が来る』の読書会からスタート

韓国・光州の旅の同行者・小森陽一さんを講師に、ハン・ガン（韓国の作家。2024年ノーベル文学賞受賞）の『少年が来る』の読書会。旅を企画してくれた“たびせん”の集会所が会場。読むことがつらくなり、もう閉じようかと葛藤が起きてしまう小説。1980年5月18日、光州民主化運動。独裁政権に抵抗した、たくさんの学生・市民が軍隊の弾圧で尊い命を落としたのでした。若い命を閉じた身に何が起きたのか。生き残ったものは、あれからどうやって生きてきたのか。子どもを失った母親は、どんな人生を送ってきたのか。丹念な取材の下、死者と生き残った者の声にならない声を書いている。「書く」ということが作者にとって、どんなにつらく苦しいことだったろう。でも、書いておかねばならない。そのためには単純な方法では表現できず、主語が二人称「君」になったり、一人称「私」になったりする。死ぬことを覚悟した主人公・トンホ少年が心に刻まれる。

聞こえ、全く眠れない夜だった。たくさんの遺体を中学校の顔写真と合わせて捜した。ビニールに包まれた息子の遺体を母は認めることができなかった。何もしてあげられなかった悲しみ。幼い頃の息子の思い出を辿りながら、どこかにいるのではないかと今でも思ってしまう。」

＝右上写真＝ 母 キム・ギルジャさんとガイド キム・スウォンさん

「息子の名誉を回復しなければ。ただ民主的な活動をしただけなのだ。死ぬことを覚悟して最後まで残っていた息子を誇らしく思う。ただ暴動と片付けられたら耐えられないことだ。民主主義を支えなければ。息子を誇りに思って生きていこう。母の部屋は政府に監視された。「これ以上、闘争しなければ一生苦労させないお金を出す。」こんな脅しを一切拒否して一銭ももらわずにやってきた。長い間、正しいことを知らせることができずにいたが、ハン・ガンの『少年が来る』出版のお陰で世界中に知られるようになった。ハン・ガンとも会って話を聞いてもらえた。母として、しっかりと生きていきたい。私のことを“オモニ”と覚えておいてほしい。」

市民と運動が、歴史と社会を動かしてきたこと。記録・記憶することで継承への努力をすること。民主化運動の原点を光州から学んでいきたい。

### ボランティアのキム・ヨンチョル

#### (金容哲)さんのフィールドワーク

#### ～ 5.18 民主化運動を忘れまいで



8月1日から3泊4日の旅。民主化運動の起きた光州を訪ねる。収容されていた元刑務所跡は、今は自由公園で5.18の記憶をのこしている。焼ける程に暑い光州の街を、あふれる情熱で語り最後までボランティアで案内してくれたのはキム・ヨンチョルさん。当時は朝鮮大学の学生だったとのこと。あまりの暑さと、目を覆いたくなる弾圧の残酷さを目の前にしながらも、「忘れないこと、忘れたら同じことを繰り返すのです。だからしっかり見てほしい」と語るキム・ヨンチョルさん。全身全霊で私たちに伝えようとして

### キム・スウォンさんとの再会



現地ガイドのキム・スウォン（金寿栄）さんと再会できました。2011年4月に笠木透さん、増田康記さん、あい子さんたちと詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）を訪ねる旅をした時、延世大学の尹東柱記念館を案内してくれました。あい子さんがサンダルのような履物だったので、自宅から歩きやすいスニーカーを持ってきてプレゼントしてくれました。コロナ禍、全くガイドの仕事がなくなり、大型バスの運転手の資格をとったけれど、年齢で雇ってもらえず、タクシーのドライバーをやりながらガイドの仕事の復活を待っていたとのこと。日本語を忘れていくのではないかと不安な日々だったが、旅行ができるようになって日本のお客様が見えたら「心の中にいっぱい日本語が刻まれていたから、あふれるように言葉が出てきたのよ」と喜びを語ってくれました。4日間の旅でもすべての解説や講演会の通訳を見事にこなしてくれたのです。



いる誠実さに導かれて、歴史を辿って歩き続けました。光州の街の全てに5.18民主化運動の記念が遺されていました。若者たちと市民が、尊い命を犠牲にして大統領直接選挙へと民主化への道を切り拓いてくれたのです。光州の市民たちも炊き出しをして抵抗運動を応援したのでした。応援をすることが光州市民の伝統となり、社会を変えていく文化運動へと広がり、今、光州市は文化都市として世界の注目を集めています。

65歳になられたというキム・スウォンさんのはつらつとしたガイドは、自分の考えもきちんと語り、日本と韓国の人々との素晴らしい文化交流となりました。「2024年12月3日、当時の大統領が戒厳令を出した時、光州での記憶が蘇り、ここまで民主化を進めてきたのに再び独裁政権に戻ったら大変なことになるという危機感で、私たち市民は誰が指示したのでもなく、自然発生的に国会前に集ったのです。ソウルの冬はとて寒さが厳しいので、着れるだけたくさん着込んで行きましたよ。」（特定非営利活動法人クッキングハウス会代表）（『クッキングハウスからこんにち』224号より転載・イラスト 松浦素子）

### トンホ少年の母(オモニ)に会えた

『少年が来る』の主人公のトンホ少年、故ムン・ジェハク君の母キム・ギルジャさん（84歳）が私たち一行に会いに来て下さり、当時の様子を語ってくれました。「高校一年、17歳だった息子は、戒厳軍の無差別の弾圧で1980年5月27日に死んだ。家を出るなと止めたが、飛び出していき見えなくなった。ずっと息子を捜した。豆を炒るような銃弾の音がひっきりなしに



# ヒグマは待ってくれない — 北海道の出没対策に今、必要なこと 稗田 一俊

このところ、ヒグマ出没の報道で賑わっています。ヒグマが畑を荒らし、住宅地を徘徊、ゴミ箱を漁るなど、ヒグマの出没情報が相次ぎ、北海道は「ヒグマ警報、注意報」を發出し続けています。

そんな「ヒグマ注意報」が發出された地域で、偶然ですが、水田で米を食べているヒグマを見ました。「お〜いっ、だめだよ〜、あっち行け〜!」と声をかけたら山林の方へと逃げて行きました。黄金色に実った田んぼは山林に接し、ヒグマがこの山林から侵入したことは明白なのに田んぼと山林の境界に電気柵は設置されておらず、ヒグマはほったらかし状態でした。



ここでみなさん、よ〜く考えてください。この時点では農業被害ですが、このままヒグマの徘徊をほったらかしにしていたら、どうなるのでしょうか？ ヒグマは行動範囲を広げ、やがては住民が危険に曝されるようになると思いませんか？

2025年7月12日、北海道南部の福島町で、新聞配達員がヒグマに襲われ死亡する事件が発生しました。この数日前から、山林に接した住宅地の路地をヒグマが徘徊し、ゴミ箱を漁り、住民もヒグマを目撃し、新聞配達員もヒグマを見て怖がっていたようですが、その状態にあっても、ヒグマの徘徊はほったらかしだったのです。

なぜ、ヒグマが住宅地の路地を歩いているのに電気柵による出没抑止対策をしなかったのでしょうか。疑問を感じませんか。電気柵を設置してヒグマが住宅地へ侵入しないようにしていたら、新聞配達員は命を落とすことはなかったと思いませんか。

北海道のヒグマ対策には手順があり、ヒグマの出没情報

があっても、まず有害性の判断を優先するようになっており、出没抑止対策をしないのです。ここでも疑問を感じませんか。

有害性が無いと判断されたとしても、放置していれば、その後に行動範囲が広がり、人との不意の遭遇があれば襲われる危険性があるし、生ゴミに拘り、そこに人が不用意に近づけば排除目的で攻撃を受けるかも知れないのです。何よりも優先すべきは、有害性の判断よりも、まずはヒグマ出没情報を得た時点で、即座に出没抑止対策をすることではないでしょうか。

畑や住宅地に出てきているのにヒグマを放置したままで「有害性の判断」をする行為や、出没抑止対策をしないで「ヒグマ注意報」を發出するだけの行為がいかに危険か、気がついていただきたいと思うのです。

ヒグマをバカにしてはいけません。ヒグマは学習能力、判断力に優れた動物です。この能力を人間側がうまく利用すれば効果的なヒグマ対策が確立できようというものです。そんな思いを込めて、今回「つり人社」から『山でヒグマに遭わない・死なない観察力—その『痕跡』を見落とすな』(長谷智恵子さんと共著)を出版しました。参考にさせていただければ幸いです。

当初は農業被害であっても、行動を放置していれば人命財産に及ぶ被害へ発展することも有り得るのですから、北海道はヒグマ生息数の推定を目的とした、安全性の裏付けが明確ではない、体毛を採取する「ヘア・トラップ」調査研究を取り止め、この莫大な予算を、まずは道民の安全な暮らしの確保のために、なによりも最優先でヒグマ出没抑止対策に使うべきです。それを北海道のヒグマ対策室に働きかけることが必要です。

(「流域の自然を考えるネットワーク」フリーカメラマン)

## 原発事故から市民運動に — 原子力資料情報室 50 年を振り返って

1986年4月、チェルノブイリ原発事故が起きた日、私は出産予定日を迎えていました。事故の4日後、帝王切開で息子が誕生しました。命の誕生と原発事故が重なったその瞬間、私は「この社会で生きる子どもたちの未来を守りたい」と強く思いました。1988年1月、原子力資料情報室代表の高木仁三郎さん(2000年に死去)を講師に旭川で開催



前列中央が高木仁三郎さん

された「語り手養成講座」に参加し「市民科学者として生きる」ことを決意したあの日が、私の原点です。

2011年3月11日の福島原発事故で多くの人が被害に遭い、放射性物質が福島だけでなく近郊の県にも広がりました。道内全域から原告を募り、「泊原発の廃炉をめざす会」が立ち上げられました。共同代表は小野有五さんと弁護士。私は初代の事務局長として、ニュース編集を担当しました(現在は別の方が引き継いでいます)。

2018年10月9日、原告として意見陳述を行いました。同年9月に発生した北海道胆振東部地震によって道内全域がブラックアウトを経験。外部電源喪失による原発の危険性を訴えました。

原発事故がまるでなかったかのように、各地で再稼働が進められています。未来の子どもたちが安心して暮らせる社会を、私は心から望んでいます。(樋口みな子)



意見陳述する樋口

## お薦め本

### 耳の聴こえない母と語る、 生むこと、生きること



#### 聴こえない母に訊きに行く

2023年発行 五十嵐大著  
柏書房 1,870円



優生保護法の問題を検討している仲間の紹介でこの本を手にとった。

1983年生まれの著者・五十嵐大さんのご両親は耳が聞こえない。父親は三才の時に結核の特効薬を服用したせいで聴力を失った。母親は生まれた時から耳が聞こえない人であった。母親の両親も、姉2人も健聴者である。この親のことを書いたのは、優生保護法の別表に遺伝性のろうあ者は優生保護法の対象になると書かれているからである。だから、大くんのご両親は優生保護法の対象には元々ならない人である。むろん対象になる人が不妊手術・中絶をされていていいと言っているわけではない。

この本の構成は、フリーライターをしている大という青年が、自分を産んでくれた母親にその生い立ちからの話を聞くことであるが、その契機になったのはおばあちゃんの一言である。ある時おばあちゃんが大青年に「あなたのお父さんとお母さんは駆け落ちしたんだよ」と教えてくれたのを機に、この青年は母親と向き合おうとしたのである。非常にわかりやすい文章なので、どんどん読んでいける。

青年は、二歳と五歳離れた姉たちにも幼い時の母親と姉の関係の聞き取っている。母親の恩師である大沼医師にも聞き取りをしている。母親は1954年生まれだから筆者(西村)より二歳年上である。私とほぼ同時代を生きてきた人で、生まれは宮城県の塩釜である。母親は普通学校に進学し、そこでのエピソードも描かれているが、その後聾学校に移り、そこでとても優しい大沼先生に出会った。

この青年の記述によれば大沼先生は口話教育に熱心だったようだが、本を読むと子供たちがみな手話を使っている。手話教育がなされていたんだなあと思った。私の知っている札幌のろう学校では1960-70年代には手話は禁止されていたと思う。間違っていたら教えてほしい。

ところがある日保護者から「いくら話すことを学んでも話せないじゃないか」と非難を受け、大沼先生はさまざまなことを真剣に学び手話に辿り着いたようである。この本の取材当時、大沼先生は東京にあるリレートークの法人の理事長になっておられた。

本の終盤には優生保護法の関係で私の友人である藤木弁護士が出てくる。藤木さんの弟さんは耳が聞こえないことから彼は様々な発信をしているので、この青年も藤木さんと知り合ったようである。

私自身は、最後のエピローグの部分が一番考えさせられた。青年がお母さんに「聞こえる子供を産みたかったのか、聞こえない子供を産みたかったのか」と質問した部分を振り返っている。この部分に答えはあろうはずもないが、それまですごい速度で読んできたのが、この部分だけは立ち

止まって考え込んでしまった。

私の個人的体験だが、1980年に重度の脳性麻痺の夫婦の子供である沢井君の出産に立ち会う。その育児に私と私の連れ合いが数年間関わっていたが、その出産の際、重度脳性麻痺同士だから子供を産むべきではないなどという医者も看護師も保健師もいなかった。だから1983年当時宮城県の塩釜で耳の聞こえない夫婦に不妊手術・中絶を強いるような行政やドクターが存在したのか、それがわからない。

でも実際には、私が担当した北海道の裁判で、1980年に知的障害のある妻が妊娠したとき不妊手術・中絶を強いられている事実がある。1980年代静岡の登呂という町で生活する沢井さんを困む静岡大学生や市民たちは誰一人優生保護法などと関係ない生活を送っていたが、そうでないところには優生保護法の存在に怯える人がいたわけである。

この本は大事なことを考えさせてくれる作品である。紹介してくれた方に感謝をしたい。(弁護士・西村武彦)

## 記憶をつなぐ遺言

### — 名もなき証言者たちの声に耳を澄ませて



#### 最後の証言者たち—戦場体験者・ 戦争体験者からのメッセージ

2025年発行 澤田猛著  
高文研 3,300円

戦後80年を迎えた日本において、戦争の記憶を次世代へと手渡すために編まれた貴重な証言集です。著者の澤田猛さんは、1975年に毎日新聞社に入社して以来、戦争や災害、公害の時代を生き抜いた「名もなき証言者たち」の声を丹念に聞き取り、そのやるせない怒りや願いを伝えてきました。語り手の多くは、本書が刊行された時点で亡くなっており、まさに「最後の証言者たち」からの聞き取りでした。

ひとりひとりの体験を、各地に足を運び現地取材・調査をすることによって、アジア太平洋戦争とは何であったのかを浮き彫りにします。

著者は、実際に現地に足を運び、人びとの語りを聞き、それぞれの体験がどのようなものであったか、それが現在とどうつながっているかを明らかにしています。

震洋特攻隊、BC級戦犯、重慶爆撃、ニューギニア遺骨収集、朝鮮人軍属、学童疎開、戦争孤児、マレー半島ピースサイクル、フィリピン戦、元人民解放軍女性兵士、731部隊、空襲、ゼロ戦搭乗員、フィリピン残留二世、大森捕虜収容所、B29搭乗員、元海軍整備兵など。あまりにも重い体験ばかりで、一気に読めなかったです。何度も挫折しそうになりながらようやく読み終わりました。

証言の一つ、「貫いた新憲法精神」では、震洋特攻隊員として戦争を生き延びた山田治雄さんが、戦後も平和主義を貫き、93歳まで市議として活動した姿が描かれています。彼の「戦後」は、単なる生存ではなく、平和を守るための実践でした。

また、「消えた五粒の乾パン」では、造形美術家の三橋國

民さんがニューギニアで出会った台湾の少年との出会いが語られます。殺されると思った少年がブルブル震えながら、「ヘイタイサン、カンベンしてクダサーイ」と訴えた場面は、「拳手の礼をし続けていた童顔の少年」だったと語り、著者の「哀切極まりない光景を想像して胸が痛んだ」という言葉とともに、深く心に残りました。

「ゼロ戦『神話』の実相」では、ベテラン搭乗員が語る戦後の沈黙と葛藤が胸を打ちます。

これらの証言を通じて、戦争の悲惨さを伝えると同時に、戦後をどう生き抜いたか、そして何を後世に伝えたいかという「遺言」が、力強く響いてきます。

本書を読みながら、私は「記憶をつなぐ」という行為の重みを改めて感じました。証言者たちは多くは名もなき市井の人々ですが、その言葉には歴史の真実と人間の尊厳が宿っています。澤田さんの誠実な取材姿勢が、証言者たちの声を丁寧にすくい上げ、読者の心に届く形で編まれていることに深く感銘を受けました。

「戦争はしてはならない」その強い願いがひしひしと伝わってきます。数編でもいいから、ぜひ多くの人に読んでいただきたい一冊です（樋口みな子）

## 熊笹の下の声を聴く

### — 掘り起こすのは、心と歴史



和解と平和の森—北海道・朱鞠内に  
朝鮮人強制労働の歴史を刻む

2025年発行 殿平善彦著  
高文研 2,000円

日中戦争からアジア太平洋戦争にかけて、日本は深刻な労働力不足を補うため、植民地であった朝鮮から多くの人々を動員しました。彼らは危険な土木工事や炭鉱などで酷使され、虐待の末に多くの命が失われました。

朱鞠内はもともと20戸ほどの開拓農民による入植地として始まりましたが、1935年から43年にかけての鉄道・ダム工事の時期には数千人の日本人と、少なくとも3,000

人の朝鮮人労働者が動員されました。

過酷な工事現場からは死者が次々と出て、その大半は墓地から外れた山林の地下に埋められ、やがて熊笹が地面を覆い、死者の存在は戦後長く忘れ去られていました。

本書は深川市の僧侶、殿平善彦さんが強制労働犠牲者の遺骨問題に取り組んだ、半世紀におよぶその活動の貴重な記録です。

私も旭川に住んでいた当時1980年代に一度、朱鞠内で遺骨発掘に参加したことがあります。そのときに参加していた学生の一人が「遺骨を掘り起こすことは、自分の心を掘り起こすことだ」と語った言葉が、今も強く印象に残っています。差別や虐待に苦しみながら死んでいった朝鮮人に思いをはせること。日本がした戦争の加害にも向き合ってほしいとの思いが込められていました。

コラム「民衆史掘り起こし運動」でオホーツク沿岸の遠軽町から北見市に至る鉄道の途中にある常紋トンネルに埋められた人骨の発掘にも参加したことがあり、ずいぶん昔ですが、その日の光景をありありと思い出しました。

殿平さんは笹やぶの下に眠る強制労働犠牲者に思いを馳せ、遺骨を発掘し、一人でも多くの遺族の元へ返そうと尽力しました。韓国へも何度も足を運びました。

殿平さんの信念は「死者の声を聴くこと」でした。最初は関心を寄せる市民らで始まった発掘作業でしたが韓国への返還につながっていきました。過去を掘り起こすだけでなく、未来を考える場として、97年からは日本、韓国、在日コリアンの学生や若者が参加して「東アジア共同ワークショップ」として交流と学びを続けており、加害と被害などの過去と向き合う若者たちの描写が特に心に残りました。そんな中で、韓国と日本の学生がこの場で知り合って結婚にいたった物語には感動しました。

現代の東アジアも戦争の危機と無縁ではありません。「私たちは今こそ、国境を越えてつながり、朱鞠内に集い、暴力と植民地主義の闇を照らして和解と平和の未来を見晴らす一筋の光になれば」と殿平さんは語っています。

こんな長い市民運動から、私たちが学ぶことは数多くあると思います。雪で倒壊し、のちに再生された「笹野墓標展示館」に是非行ってみたいです。（樋口みな子）



## 映画の紹介

### 「幸せの国」を夢見た男たち

『大統領暗殺裁判

— 16日間の真実』(2025/8公開)

チュ・チャンミン監督



ために加担したのか—その問いが裁判の根底にあります。

弁護士チョン・インフ（チョ・ジョンソク）は型破りな人物。「裁判は善悪を決める場ではない」と語り、軍事裁判の不条理に挑みます。裏では次期独裁者・全斗煥（ユ・ジェミョン）が裁判を操作していました。

フンジュは命令に従ったと証言するよう求められますが、それを拒みます。命令が絶対なら、市民にも銃を向けることになる—それは1980年5月の「光州事件」を予感させる問いです。

暗殺計画の中心人物キム・ギョジュは「幸せの国」を夢見て行動し、フンジュはその理想に共感していたと描かれます。歴史の重みと人間の良心を問いかける作品であり、イ・ソンギョンの遺作でもあります。（樋口みな子）

韓国は独裁政治の歴史を抱えながらも、それを正面から描く映画を生み出してきました。1979年、朴正熙（パク・チョンヒ）大統領が暗殺されます。本作は、その裁判を描いたもので、『KCIA 南山の部長たち』『ソウルの春』で語られなかった時間の隙間を埋めます。

容疑者は現役軍人で秘書官だったパク・フンジュ（イ・ソンギョン）。彼は軍事法廷で一度きりの判決を受ける立場にありました。命令に従っただけなのか、それとも理想の



## 人生は交響曲のように

『ファンファーレ! ふたつの音』(2025/9 公開)  
エマニュエル・クールコル監督

国際的に活躍する指揮者ティボ（バンジャマン・ラベルネ）は白血病と診断されます。ドナーを探すうちに、自分が養子であること、そして生き別れた弟のジミー（ピエール・ロタン）の存在を知ります。

ジミーは、かつて炭鉱で栄え今は寂れた町の食堂で働きながら、仲間と結成した吹奏楽団を唯一の楽しみに暮らしていました。育った環境も性格もまったく異なる二人ですが、ティボはジミーの音楽的な才能を見出し、弟を応援することを決意します。



この映画の白眉とも言えるのが、ジミーが初めてティボの指揮する音楽を聴くシーンです。ヘッドフォンを耳にする直前、監督は一拍の「静寂」を置きます。その沈黙が、音楽の始まりをより深く、神聖なものに感じさせてくれました。

レストランのピアノで、二人が即興で連弾を始める場面も忘れがたいものです。最初はぎこちなく、探り合うようだった音色が、次第に調和し、一つの音楽になっていく。それは、まったく異なる人生を歩んできた二つの道が重なり合った瞬間でした。

クライマックスで指揮を振り終えたティボの姿は、まさにプロフェッショナルそのものでした。それは自己犠牲ではなく、自らの仕事と人生を最後まで全うしようとする人間の気高い姿でした。

アンコールの場面では、決死の思いで指揮を執ったティボを励ますため、ジミーと楽団の仲間たちが現れます。彼らが奏でる音と声には、ティボを想う温かい心が満ちあふれていました。

意外な展開で「ボレロ」が始まり、大団円を迎えるエンディング。会場全体が一体となる演出に、思わず目頭が熱くなりました。

音と記憶、そして人生がいかにして交差し響き合うかを優しく、そして力強く教えてくれる作品でした。「ボレロ」をはじめ、音楽の持つ力に心を揺さぶられました。

映画館の明かりが灯った時、私の心には温かい音が鳴り響いていました。それは、決して順風満帆ではないけれど、それでも続いていく人生を祝福する、力強い応援歌のように聴こえました。(樋口みな子)

## 歴史の闇にもともる希望の火を追って

『宝島』大友啓史監督/原作:真藤順丈(2025/9 公開)

かつて大友啓史監督が手がけた、沖縄を舞台にした連続テレビ小説『ちゅらさん』(2001年)は続編が制作されるほど多くの人々に愛されました。その大友監督が真藤順丈の直木賞受賞作『宝島』を映画化した191分という長尺に、沖縄の戦後20年を凝縮した壮大な叙事詩です。私は原作を読んで

から映画を観ましたが、どちらも心に深く残る作品でした。

物語は1952年、アメリカ統治下の沖縄・コザ(現・沖縄市)から始まります。幼なじみのグスク(妻夫木聡)、ヤマコ(広瀬すず)、レイ(窪田正孝)、リーダーのオン(永山瑛太)は「戦果アギヤー」と呼ばれ、米軍基地から物資を盗み、貧困に苦しむ人たちに分け与えていました。ある夜、彼らはグスクたちとともにフェンスを乗り越えて基地に忍び込みますが、命がけの逃走の末、オンは姿を消してしまいます。

オンの行方を追う中で、グスクは刑事となり米軍と関わりを深め、ヤマコは小学校教師として子どもたちを導きながら祖国復帰運動の先頭に立ちます。レイは兄オンの消息を求めてヤクザの世界へと足を踏み入れ、暴力の渦に吞まれていきます。彼らの20年にわたる軌跡は沖縄の歴史と重なりながら、フィクションと現実の境界を越えて観る者の心を揺さぶります。

1959年、ヤマコが勤める小学校に米軍機が墜落し、17名が命を落とすという惨劇が描かれます。まるで当時の記憶を追体験するかのような迫真の描写に、私は震えが止まりませんでした。35年前、家族で訪れたチビチリガマを思い出しました。そこには住民たちが隠れ住みやがて集団自決に追い込まれた痕跡が、食器や人骨とともに残されていました。あのときの恐怖と衝撃がスクリーンの中で再び蘇りました。県民の4人に1人が亡くなった沖縄戦は各地に悲しみと憤りを生んだことを忘れてはならないと思います。

1970年、沖縄の本土復帰が発表された矢先、アメリカ兵による交通事故をきっかけに「コザ暴動」が勃発します。このシーンの迫力は、冒頭の戦果アギヤーの逃走劇を凌駕するもので、群衆の怒りと悲しみ、そして抑えきれない感情の奔流がスクリーンを突き破って観客に迫ってきます。沖縄の人々が抱える矛盾と苦悩、そして一線を越えたときの激しさが胸に深く刻まれました。

俳優陣の演技も圧巻です。妻夫木聡は米軍との関係に揺れながらも刑事として生きるグスクの複雑な内面を繊細に表現し、窪田正孝は暴力に染まるレイを鬼気迫る演技で体現。広瀬すず演じるヤマコは凛とした佇まいで、時代に流されずに立ち続ける女性の強さを見事に演じきっていました。

そして、物語の鍵を握るオンの存在。彼が持ち去った「予想外の戦果」が、20年の時を経て再び人々の運命を動かし始めます。「いくら基地から物を奪っても、それだけでは沖縄は変わらない」という彼の言葉がヤマコの人生を変え、観る者の胸にも深く刺さります。

本作は、コロナ禍で撮影が二度延期されながらもついに完成した渾身の一作です。沖縄の歴史的事件と、そこに生きた人々の感情を丁寧にすくい上げた映像は、ただのフィクションではなく、現代に生きる私たちへの問いかけでもあります。

パレスチナやウクライナで今も続く戦火の中、罪なき人々が命を落としている現実と、『宝島』が描く世界は地続きです。戦争の影が日本にも忍び寄る今、過去を知り想像し感じることの大切さを痛感しました。

(樋口みな子)(札幌映画サークル11月号に掲載)



## 見上げればいつだってそこに

『秒速5センチメートル』 奥山由之監督

(新海誠監督/原作のアニメの実写化、2025/10 公開)

私が松村北斗を知ったのは『夜明けのすべて』でした。言葉ではなく“気配”で共感を表す演技に、静かに胸を締めつけられました。

春の桜は「始まり」  
冬の雪は「終わり」の  
象徴。雪は貴樹(松村  
北斗)と明里(高畑充  
希)の再会を阻み、時  
間を奪います。「来年  
も一緒に桜、見るといいね」—その笑顔は電車の轟音に遮られ見えなくなってしまいます。踏切でも、流れ星の夜も、貴樹はいつも明里の背中を追いかけていました。

高校時代、花苗(森七菜)が聴くラジオから“*I love you.*”を「月がきれいですね」と訳した話が流れます。もし月が



出ていたなら、二人は淡い恋心を交わせたかもしれません。中学が別々になっても天文手帳を送り合い、心をつないでいた二人。貴樹は転校前に、遠く栃木の岩舟にいる明里に会いに行きます。

明里は貴樹に宇宙への興味を与え、世界の豊かさを教えてくれた存在でした。春の光の中、踏切ですれ違う二人。電車が隔て、反対方向へ走り抜ける—それは彼らの人生そのもの。電車が去ったあと、そこに明里の姿はなく、桜の花びらだけが舞っていました。

ある日プラネタリウムで並んで座る二人。「科学的な証明がなくても起きることはありますから」という館長の言葉通り、奇跡のような再会が果たされます。スクリーンには天の川。「一緒に見れるといいね」という約束が叫びました。

科学館に残されたPOPには「月は形を変えていつもあなたの見上げる場所にいます」と記されていました。月は明里の象徴。空を見上げればそこにいる。たとえ踏切の向こうに姿がなくても、貴樹は穏やかな笑みを浮かべて歩きます。(樋口みな子)

### 銀河通信 247 号への感想や各地からのお便り

●毎回、心の栄養を貰っています。みな子さん以外の書き手の方の文章掲載も、いいですね。暑い東京行き、お疲れさまでしたね。アクティブに行動されている事、とてもいいと思います。何が大切なのか、毎回とっても共感して拝読。今回は石牟礼道子さん、伊藤比呂美さんの著書を図書館で予約します。(札幌市・赤坂京子さん)

●9月15日、水田で米を食べているヒグマを見ました。関連する著書を是非読んでください。『山でヒグマに遭わない・死なない観察力—その「痕跡」を見落とすな』つり人社刊 URL <http://protectingecology.org/report/14228> (八雲町・稗田一俊さん)

●私は20回もネパールを訪問し、親しい友人もたくさんいますし、ネパールに親近感を持っています。それだけに、今回のネパールの革命には、どうなることかと心配しています。日本は、どうやってネパール人などの労働力を日本に呼び寄せ働かせるかだけを考えていますが、逆に言うと、ネパールからは、労働力、未来を背負う若者が流出していることになります。ネパールは老人と子供の国になったと知人は嘆いています。そんな未来が見えない国の中で遂に怒りが爆発したということでしょうが、爆発した後どんな政治が生まれるのか、とても心配です。(高崎市・堀泰雄さん)

●銀河通信ありがとうございます。今日やっと家に居る時間がつくれて、銀河通信もじっくり読み直しました。中身の濃い記事、重く受けとめています。みなさんの表現はわかりやすく心に沁み入ります。次号も楽しみにしています。

(東京都中野区・宮本紀子さん)

●銀河通信247号を一気に読みました。内容の深さに改めて感動しました。(江別市・藤田トシ子さん)

●銀河通信でどんなことが紹介されるのか楽しみにしています。通信が届くたびに、視野が広がります。9月21日に東京新聞に「原子力資料情報室」が50年を迎えたことが掲載されました。銀河通信で以前、資料情報室のことが書かれていましたね。(山形県長井市・高橋政春さん)

●みな子さん、銀河通信を読ませていただいています。一気に読めない重い課題が盛り沢山で、みなさんの行動力、知識力や探究心に、あらためて、すごいなあと思っています。あの暑い中の東京行きも、お疲れ様でした。そんな誌面に、自然のきれいな花々や景色でみなさんのセンスが所々に現れホッとしました。又、時間をかけて続きを読みます。銀河通信で知らなかったことなど知らされ、有り難いです。大変でしょうが今後も楽しみにしています。

(札幌市・佐藤美弥子さん)

### 写真帖



2025.9.24 旭岳と姿見の池



2025.9.29 朝5時半 素晴らしい朝日



10.25 早朝散歩でみた野幌の朝日



11.5 スーパームーン



10.18 公文さんの著書サイン会で イシミカワ（堀泰雄さん 画） 北大の紅葉：10.27 イチョウ並木 / 11.5 恵迪(けいてき)寮の鳥



10.13 北海道ポーランド文化協会 総会/懇親会/朗読会「午後のポエジア」@札幌・豊平館

**編集後記** 微笑みは私の祈りでした。小中学生のころ何度も転校し、孤独の中で笑顔浮かべていた私に、美術の先生が「君の笑顔はアルカイックスマイルだね」と言ってくれました。ミサで神父さまが語った「笑顔で人を幸せにするんだよ」という言葉と重なり、微笑みは空虚ではなく人の心に触れる力を持つのだと信じてきました。でも今年は苦しみや悲しみで笑顔の少ない日々でした。

昨年 11 月、我が家に東京〇〇署の警官を名乗る男から突然の電話を受け、「詐欺の容疑者だ」と脅され大金を奪われました。まったく身に覚えがないのに電話を切れなかったのです。病気に備えて大切にしていたものでした。もう思い出したくない出来事でした。皆さまもどうぞお気をつけてください。

市民運動の会費は多くをやめました、「クッキングハウス会」「札幌映画サークル」「北海道ポーランド文化協会」は続けたいと思っています。(みな子)

**購読料とご寄付をありがとうございます** (敬称略) 9,14-10.29 福島清 高橋雋 佐久間明美 溝井留美 石川有佳 中川路朋子 合田美津子 稲川良道 細川律子 新井喜美子 小西恵江子 梅沢俊 甲野恵美 合計 34,000 円は印刷と送料に使わせていただきます。**購読料の振り込み先は、1 頁右上をご覧ください。**今年最後の通信です。未納の方は振込のご協力をお願いします。Web 読者の寄付も助かります。

### 銀河通信 248 号 目次

いのちといのちの出会いで、世界は変わる—公文和子さんの講演を聞いて (樋口みな子) .....	1
記録・記憶し、そして継承していくこと—市民による民主化運動の原点を訪ねる旅 in 韓国・光州 (松浦幸子) ..	2
ヒグマは待ってくれない—北海道の出没対策に今、必要なこと (稗田一俊) /	
原発事故から市民運動に—原子力資料情報室 50 年を振り返って (樋口みな子) .....	3
お薦め本『聴こえない母に訊きにいく』(西村武彦) / 『最後の証言者たち』 / 『和解と平和の森』 (樋口みな子)	4-5
映画の紹介『大統領暗殺裁判』 / 『ファンファーレ!』 / 『宝島』 / 『秒速 5センチメートル』 (樋口みな子) .....	5-7
各地からのお便り/写真帖/編集後記/購読料とご寄付をありがとうございます.....	7-8